紀州

木の国・根の国物語

中上健次

紀州

木の国・根の国物語

中上健次

朝日新聞社

紀州　木の国・根の国物語
定価――九二〇円
著者――中上健次
昭和五十三年七月二十九日　第一刷発行
印刷所――明善印刷
発行者――藤田雄三
発行所――朝日新聞社　東京　大阪　名古屋　北九州
© KENJI NAKAGAMI. 1978
0095-254573-0042

〔主な作品〕
創作集『十九歳の地図』（河出書房新社・一九七四）
創作集『鳩どもの家』（集英社・一九七五）
エッセイ集『鳥のように獣のように』（北洋社・一九七六）
創作集『岬』（文藝春秋・一九七六）
創作集『蛇淫』（河出書房新社・一九七六）
長篇小説『枯木灘』（河出書房新社・一九七七）
〈対談＋短篇小説・エッセイ〉中上健次VS村上龍』（角川書店・一九七七）
創作集『十八歳、海へ』（集英社・一九七七）
短篇連作『化粧』（講談社・一九七八）

目次□紀州　木の国・根の国物語

序章 9
新宮 18
天満 30
古座 44
紀伊大島 56
和深 70
日置 81
朝来 92
皆ノ川 103
本宮 114
尾呂志 125
有馬 137
尾鷲 147
紀伊長島 158

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

松阪 172
伊勢 183
古座川 193
十津川 204
吉野 215
田辺 225
御坊 237
和歌山 248
高野 258
天王寺 269
終章 闇の国家 279

装釘 司修

〔写真説明〕

カバーの表、見返しは串本からみた橋杭岩。

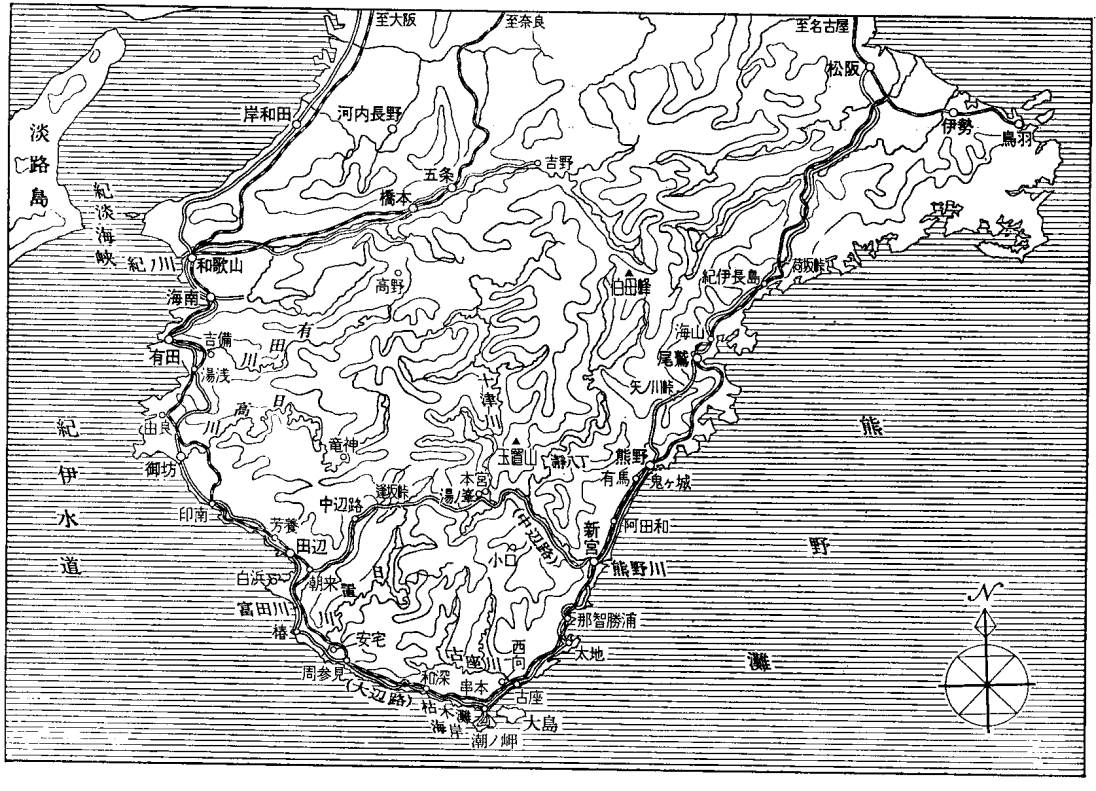
カバーの裏は日置川。

表紙は枯木灘海岸の一劃。

扉は潮ノ岬からみた水平線。

撮影・司修

〔題字〕鄭道昭「鄭羲下碑」より。


至大阪
至奈良
至名古屋
松阪
伊勢
鳥羽
岸和田
河内長野
吉野
五条
橋本
淡路島
紀淡海峡
紀ノ川
和歌山
高野
白田峰
紀伊長島
待乗峠
海南
吉備
有田
有田川
湯浅
海山
尾鷲
矢川峠
十津川
由良
高野川
竜神
玉置山
熊野
有馬
鬼ヶ城
御坊
本宮
湯峰
中辺路
蓬坂峠
印南
芳養
田辺
中辺路
新宮
阿田和
小口
熊野川
白浜
朝来
富田川
日置川
那智勝浦
椿
安宅
太地
周参見
和深
串本
古座
枯木灘
大島
潮ノ岬
紀伊水道
熊野灘
N

〈本書は、『朝日ジャーナル』の昭和五十二年七月一日号から昭和五十三年一月二十日号まで二十五回にわたり連載されたものである。〉

紀州　木の国・根の国物語

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

序章

紀伊半島を六ヵ月にわたって廻ってみる事にした。

半島とはどこでもそうであるように、冷や飯を食わされ、厄介者扱いにされてきたところでもある。理由は簡単である。そこが、まさに半島である故。

紀伊半島の紀州を旅しながら、半島の意味を考えた。朝鮮、アジア、スペイン、何やら共通するものがある。アフリカ、ラテンアメリカしかり。それを半島的状況と言ってみる。大陸の下股、陸地や平地の恥部のようにある。半島を恥部、いや征服する事の出来ぬ自然、性のメタファとしてとらえてみた。いや、紀伊半島を旅しながら、半島が性のメタファではなく性という現実、事実である、と思った。たとえば一等最初に降りたった土地、新宮(しんぐう)。その土地で半島を旅する男、私が生まれ、十八歳まで育ったので、これまでも新宮と覚しき土地を舞台に小説を書いたが、そこを征服する事の出来ぬ自然、性の土地だと思った事はなかった。熊野川は女の性器、膣のようにある。尾鷲(おわせ)

の、借銭に困った女が、あの上田秋成の『雨月物語』巻之四「蛇性の婬」の場所、浮島の遊廓に身売りされて来たからだけではない。

そして半島をまわる旅とは、当然、さまざまな自然とそれへの加工や反抗、折り合いを見聞きする旅である。観光用の名所旧蹟には一切、興味はない。私が知りたいのは、人が大声で語らないこと、人が他所者には口を閉ざすことである。

とある村ではレプラの話をきいた。

とある村では、バイオリンに使う弦の最初の作業過程を見、切り取った肉のまだついた馬の尻尾から毛を抜きとる青年にあった。腐肉のにおいのたつ工場で、塩洗いしてあるという尻尾の、塩の味を知りたくて、毛をなめた。

紀伊半島、紀州とは、いまひとつの国である気がする。

まさに神武以来の敗れ続けてきた闇に沈んだ国である。熊野・隠国とはこの闇に沈んだ国とも重なってみえる。その隠国の町々、土地土地を巡り、たとえば新宮という地名を記し、地霊を呼び起こすように話を書くとは、つまり記紀の方法である。

何度も言うが単なる観光旅行でもないし、風土記でもない。むしろ、アメリカの作家ウィリアム・フォークナーが、ミシシッピ州ヨクナパトーファ、ジェファスンの地図をつくり、フォークナー所有と記す方法と似ている。

神武のように私が、地名に記す新宮や紀伊天満や、古座を征服し、同時に稗田阿礼のように語り書くとも言えるし、私は単に、見えない神武、見えないスサノヲに従って、語り書くだけであると

も言える。

ミワサキ、ウグイ、ナチ、テンマ、カツウラ、タイジ、見なれた漢字を取り払い、音だけにすると、この半島の隠国、敗れて闇に沈んだ国の異貌がみえる。コザ、ヒメ、タコ、ワブカ、スサミ、アッソ、町の名はそう続く。何やらその地名の発音は、南島のもののようにみえるのである。

旅の出発点、新宮に着き、一等最初に話をきいたのは、サン婆さんだった。どんな予備知識もないし、準備もなかった。

私は自分の姉の嫁ぎ先に、ちょうど私の小説『枯木灘』や『岬』のひき金になった七、八年前の殺人事件のいきさつを話してもらおうと、行ったのだった。その事には、私なりの企みがあった。その殺人事件が、腹と腹をこすり合わせる新宮という土地の象徴でもあると思うし、事実を記そうとするルポルタージュ、いや、ドキュメントによって、小説を喰い破り、さらに小説を補強する、そう思ったのだった。訪ねて行った姉の嫁ぎ先には、人はいず、それで、サン婆さんの家の玄関をあけた。私はそこでは遊行の者に似ている。遊行の者と違うのは、芸もなしに、門先で、人の話にあいづちを打ち、一緒にわらい、一緒に泣くことである。

サン婆さんは今年九十歳、明治二十二年の生まれである。大柄にみえる。話しはじめるとかっちり肥った顔の頬に赤みがさす。

サン婆さんは三重県相野谷（おのだに）の大里、熊野山中の出身である。サン婆さんの一生とは、手のつけようのない自然が何をするにもまずある、紀伊半島に住む人の典型でもある。六人きょうだいの真ん

中に生まれ、十五の時、男親に死なれ、郡長の家に女中奉公に出た。結婚したのは二十三の時、兄の紹介だったが、嫁入りの夜、雨が降った。杉皮ぶきの屋根から雨がもり、花婿がミノカサを着て屋根をなおしに行った。

「自分の坐ったあるとこに雨ゃふってきて、涙こぼしての」

とくやしがる。

「もうこんなおしげたとこへ来て、みたことも会うたこともないとこへ来て」

新婚当時、夫は山の下刈り、筏組みなどの仕事をしていた。

米が一升三十銭の頃、下刈りは日当十五銭、筏組みは六十銭、当然、「わしも働かんならんわい」

サン婆さんの手は大きくて指は太い。働きづめで九十の今に至っているからしっかりした手なのか、そんな手だったから、共稼ぎを苦と思わなかったのかもしれない。

北海道へ行ったのは、あれが一歳の時だから、と六十一歳の長男を引き合いに出して言う。サン婆さんは北海道に六年いたことになる。なにもないところで、「山で木を切って、小屋つくって」とフンゼンとした。

「三つの子負うて、五つの子連れて、家へ帰ろと思て、駅へ何回いたかわからん。駅員に、みんな来た時はつらかったんや、いまはお金あったら米買えるけど、わたしら買おと思ては買えなんだんさか、ジャガイモふかして食べたんや、しんぼうしなあれと、なだめられたん」。その駅まで一里はある。

或る時、豆の畑に監獄部屋からの脱走者がかくれていた。警官やろか、立ちん棒が馬に乗って

追わえ、自転車で追わえてくる。這って逃げるのはみえたが、立ちん棒に訊ねられ、「知らん」とサン婆さんは言う。見つけ、つかまえたら、さかさまにつるして、下から火をあぶって殺すらしい。三人に一人、立ちん棒がつく。

今の天皇陛下が北海道に視察に来た事がある。アイヌが十勝の川を丸木舟で渡ってみせたのを憶えている。

兄に金をウヤムヤにされたりして六年で北海道からもどり、夫は新宮の木場に働きに行く。一日一円十銭、家賃月三円、また共稼ぎである。日清は大里で知り、日露では郡長さんの家で知り、アメリカとの戦争はこの家で経験した。この家の最初の嫁と孫は空襲の爆弾で死んだ。二十年四月七日午前十時十五分。爆弾で死んだ日を細かく記憶している。嫁は腹が立ち割れ、孫は足をなくしシフテリアで半年後死ぬ。

正月の元日に気分が悪いと夫は言って寝込み、三月十三日、朝三時四十八分に死ぬ。十年前の事である。やさしい夫だった。頭ひとつ張られた事はない。

「手らふりあげたら、うちへ行こ、うちへ行こと思たんやのに」とわらう。働きに働いたが、「尻に敷くだけの土地ひとつあったら遊ぶのが仕事や」と、わらう。

旅の出発点と選んだ新宮の、その出発点がサン婆さんである。サン婆さんの語る一代記は、しっかりと書き込まれたリアリズム小説のような味がある。そしてこのサン婆さんの話からも、半島が半島であるという半島的状況が抽出できるのである。それを「彼方」の思考とでも言おうか。たとえば朝鮮半島の人間たちが彼方の日本に密航してくるようにである。

北海道は彼方である。ブラジルやアメリカは彼方である。いや補陀落は彼方である。彼方に甘い話があったとしても、いや、たとえ彼方に人があこがれても、滅多に人は出かけるものではない。彼方の甘い話にイチかバチかでかけてみるほうが、ここよりもマシ、というのだろうか？　北海道、千葉に、紀伊半島と同じ名がついた土地がいくつもある。

紀伊半島は海と山と川の三つの自然がまじりあったところである。平野はほとんどない。駅一つへだてるとその自然のまじり具合がことなり、言葉が違い、人の性格は違ってくる。古座の空浜、天満の出腰、新宮のキツネ。そうハヤシ言葉にあるが、古座の海では魚が獲れず貧乏で、天満は重い物を持つ仕事をするせいか腰がまがっていて、新宮はキツネのようにズルがしこい、ということだろう。三つの土地に共通するのは、船の出入りがあった事だろうか。キツネといえば、こんなシャレた文句もある。

新宮のキツネは尾のないキツネ
わしも二、三度だまされた

雌ギツネか雄ギツネか分からぬが、このシャレた文句を、雌ギツネと取ると、観光地ではないが、材木商たちの取引場所であり、金の捨て場であった大王地という花柳界を持つ新宮が浮かんでくる。材木と共に栄え、材木が新宮に降りて来なくなってからは衰退しはじめた大王地は、隠国、闇の国ともつながってある。

その大王地の「養老館」とは、幸徳秋水や大石誠之助が、酒を飲んだところである。大逆事件は、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo